

臨床病理学教室（旧病理学第一教室）のあゆみ（※2010年作成）

病理学教室は、1911年4月6日に川村麟也が初代教授として着任されてから、西部増治郎、鈴木遂、赤崎兼義（1989年10月ご逝去）、伊藤辰治（1985年1月ご逝去）、藤巻茂夫（1983年2月ご逝去）、北村四郎（1990年10月ご逝去）、大西義久、大星章一（1978年6月急逝）、渡辺英伸、内藤眞、味岡洋一の歴代教授によって整備・拡充され現在に至っている。二講座一教室で運営されてきた病理学教室は、1976年4月から病理学第一教室（大星章一、渡辺英伸、味岡洋一教授）と病理学第二教室（大西義久、内藤眞教授）に分かれ今日に至っているが、新潟病理研究会（1990年～）および同窓会は毎年5月に病理学第一・第二合同で行われている。

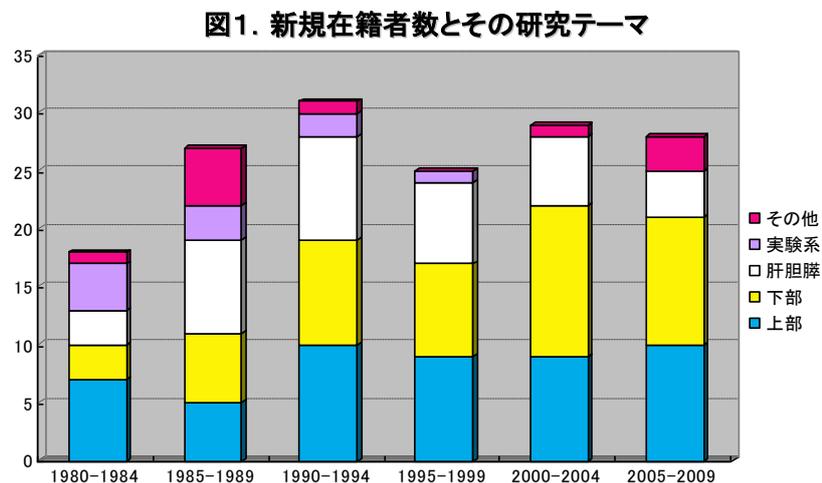
1. 研究

1-1. 教室在籍者と研究分野の推移

第一病理学教室はここ四半世紀、人体材料を用いた消化器病理を中心に研究を行っている。渡辺英伸教授着任（1979年）以降、教室の者が執筆に携わった著書論文（1979年～2009年）は994編（邦文713編、英文281編）に及ぶ。

渡辺英伸教授就任以降、2009年までに156名（学内98、学外58）が教室に在籍し研究生を送った。学内は第一外科、第三内科、小児外科、整形外科、泌尿器科、第二内科、口腔病理から、学外は北海道大、旭川医大、東北大、東京大、東京医大、東邦大、群馬大、山梨医大、富山医薬大、名古屋大、山口大、九州大、福岡大、久留米大、大分医大、長崎大、市中病院（佐久総合病院他）、海外（中国、ブラジル、ロシア）からと、国内外を問わず広く人材を受け入れてきた。この他、1983年から2006年、国際協力機構（JICA）を通じて、毎年2～3名の中南米からの研修生を受け入れた。

図1は、1980年以降新規に在籍した教室員の推移と在籍者の主な研究テーマ（上部消化管、下部消化管、肝胆膵、実験系、その他）である。1980年代前半は大星教授の流れを汲む癌培養細胞株を用いた実験的研究を行う在籍者が2割弱を占めたが、1996年以降の新規在籍者は全員が人体材料を用



いた研究を行うようになった。また、1990年代より分子生物学的手法を導入した研究が増加、1995年には免疫染色室を分離し新たに遺伝子実験室を改築した。西研究棟改修工事に伴い、2002年7月から2003年5月の期間、膨大な資料（プロトコル、ガラス標本、マクロスライド）を旧附属小校舎へ移転するという試練があったが、無事乗り越えられた。

以下に教室在籍者とその研究テーマを記す。仲間健（胃硬癌の発生機序、間質線維成分の増生機構およびその癌細胞に対する役割）。岩淵三哉（後述）。渋谷諭（消化器病理学の研修）。伊津野稔（悪性貧血における多発内分泌微小細胞腺腫、炎症性腸疾患）。梨本篤（胃癌術前化学療法効果の組織学的検索）。西巻正（胃消化性潰瘍の治癒機序）。山際岩雄（先天性胆道閉鎖症の病理）。堀向文憲（虚血性腸炎）。白井良夫（胆嚢癌の肉眼所見と画像診断の対比）。成澤林太郎（内視鏡と病理組織像の対比）。橋本秀之（動物実験、培養、免疫組織化学）。須田武保（大腸癌）。藍沢喜久雄（ヒト胃癌培養細胞株）。味岡洋一（後述）。鬼島宏（後述）。佐々木亮（消化管の神経原性腫瘍、腸管悪性リンパ腫、胃癌）。広田雅行（ヒト神経芽細胞腫培養株を用いた制癌剤感受性）。相川啓子（純粋 IIb 型早期胃癌）。藤沼澄夫（クローン病粘膜の脂肪酸結合蛋白の動態）。人見次郎（後述）。内田克之（胆嚢癌の発育進展）。近藤公男（先天性胆道拡張症、胆道疾患、胆嚢癌における脈管侵襲）。若林泰文（実験十二指腸癌、十二指腸炎）。人見（旧姓奥島）緑（人体病理全般、病理解剖研修）。新津義文（病理解剖研修）。田口夕美子（炎症性腸疾患、早期大腸癌、分類不能炎症性腸疾患の再検討）。野田裕（肛門パジェット病、家族性大腸腺腫症の乳頭部病変、十二指腸乳頭部カルチノイド腫瘍と内分泌細胞微小腺腫の特性）。山口正康（腸結核や潰瘍性大腸炎に合併する癌）。山中秀夫（残胃癌の特性と発生、吻合部胃炎との関連）。古田耕（膵癌の膵管造影と組織像の対比、膵嚢胞性病変）。酒井達也（癌進展様式の臓器別特徴）。本間照（大腸過形成性ポリープ、大腸病変の細胞動態および大腸隆起性病変の表面微細所見、大腸上皮性腫瘍の細胞動態）。谷川俊貴（膀胱癌の細胞動態）。小宮隆瑞（病理解剖研修、肝細胞癌・胆管細胞癌の混合例）。黒崎功（胆嚢粘膜と胆嚢癌の BrdU を用いた細胞動態）。佐藤俊輝（胃癌の組織学的診断基準の確立と発育進展、組織異型度別にみた分化型胃癌の特性）。羽賀正人（平坦型胆嚢癌）堀田哲夫（ヒト骨肉腫におけるアルカリホスファターゼの意義；培養株を用いて）。多田哲也（食道癌の組織学的診断基準の確立と発育進展、早期食道癌の臨床病理学的研究）。千田匡（大腸癌の機能分化と進展、早期大腸癌の発育進展）。宮崎有広（胃癌の原発巣と転移巣の病理学的特性）。片山麻子（胆嚢 pm 癌の臨床病理）。佐藤正弘（粘液産生膵病変、膵疾患における AgNOR 染色の研究）。阿部実（胆嚢癌の超音波内視鏡像と組織像との対比、胆嚢病変の表面模様の特徴、胆嚢癌の実体顕微鏡からみた表面性状）。太田玉紀（1993年、助手、直腸の粘膜脱症候群、クローン病、ベー

レット病・単純性潰瘍). 衛藤薫 (組織異型度よりみた分化型胃癌の核 DNA 量). 前島威人 (胃腺腫の癌化率と癌の形態発生). 石川裕之 (腸結核の病理形態学). 藤原敬人 (1995 年, 助手. ヒト消化管由来の内分泌細胞癌株の樹立とその特性解明. 消化管内分泌細胞癌と肺小細胞癌の比較. 内分泌細胞癌の組織発生; LOH, RER をマーカーとして. 遺伝性非ポリポーシス性大腸癌の分子生物学的研究). 片桐耕吾 (高・低異型度大腸癌の生物学的態度の比較: DNA ploidy pattern). 加藤法導 (微小分化型胃癌の p53 蛋白過剰発現. 未分化型腺癌の発育進展様式). 大橋泰博 (胆嚢癌の組織発生, 細胞増殖能, p53 発現). 小山恒男 (胃平滑筋腫と平滑筋肉腫の細胞増殖能. 胃病変の表面性状). 小林正明 (大腸管状腺腫および陥凹型大腸上皮性腫瘍の増殖細胞分布. 大腸腺腫・腺癌の p53 蛋白異常発現とアポトーシスとの関係). 前尾征吾 (高・低異型度大腸癌の細胞増殖能の比較). 渡辺和夫 (Barrett 食道癌の組織発生). 武井和夫 (腺腫由来胆嚢癌と de novo 発生胆嚢癌の細胞増殖能と p53 蛋白異常). 植木淳一 (大腸病変の表面性状. 大腸腺腫・大腸早期癌の肉眼型別出現頻度, 担癌率). 吉田光宏 (高・低異型度大腸癌の p53 蛋白発現頻度, PCR-SSCP による p53 遺伝子異常の検出). 王静芬 (卵巣における原発性粘液性腺癌と大腸からの転移性腺癌の鑑別). 西倉健 (後述). 遠藤泰志 (後述). 粕谷和彦 (膵癌の管内進展部と過形成上皮との形態学的鑑別. 膵癌の細胞増殖能と核 DNA 量. 膵癌, 胆道癌診断における p53 免疫染色の有用性). 生越章 (骨肉腫培養株 (NOS-1, NOS-2) を用いた骨形成メカニズムの解明). 糸井隆夫 (急性胆嚢炎. 膵胆管合流異常に合併する胆嚢癌の背景粘膜). 飯利孝雄 (胃 sm 癌における細胞異型度と細胞増殖能, p53 異常). 中川悟 (食道癌の臨床病理と p53 遺伝子異常). 斉藤英俊 (大腸 sm 癌の K-ras 遺伝子変異). 佐々木正貴 (高・低異型度大腸癌と K-ras 異常. 大腸癌微小リンパ節転移の CAM5.2 を用いた免疫組織学的検討). 若井俊文 (肝細胞癌の細胞増殖能と p53 変異). 田中 (旧姓安田) 敦美 (膵癌の p53 蛋白異常). 松林宏行 (膵粘液化生上皮の K-ras 遺伝子変異). 梅沢裕信 (NSAIDs による reactive gastritis の組織形態像). 良沢 (旧姓廖) 昭銘 (平坦型胆嚢癌の実体顕微鏡所見). 松田圭二 (潰瘍性大腸炎の大腸粘膜に発生する腫瘍の p53 異常と細胞増殖能. 胃筋原性腫瘍の病理). 榎本博幸 (胃炎, 胃癌と H. pylori の関係. 切除胃を用いた H. pylori 胃内分布). 桑原明史 (大腸腫瘍の発育進展と p53 遺伝子異常との関連). 横山直行 (p53 変異からみた胆嚢癌の国際比較; チリ胆嚢癌). 桑原史郎 (食道 dysplasia の p53 遺伝子異常. p53 遺伝子変異からみた食道癌の heterogeneity). 安田一弘 (大腸絨毛状腫瘍の臨床病理学的検討. 大腸表層拡大型腫瘍の病理形態学的特徴). 今泉聡 (骨肉腫細胞株を用いた骨形成因子の研究). 山野三紀 (膵管上皮の異型度分類. 膵癌の発育様式. 膵の浸潤癌, 上皮内癌, 過形成における LOH 解析. 膵癌の粘液形質と生物学的悪性度. 膵腫瘍の組織発生と発育進展. 乳頭部

癌の肉眼像と細胞形質・増殖能). 柏村浩 (早期胃癌微小リンパ節転移の CAM5.2 を用いた免疫組織化学的検討). 橋立英樹 (後述). 丸田和夫 (胃 MALT リンパ腫の組織像と細胞増殖能, モノクロナリティの遺伝子学的検討). 山田聡志 (大腸腫瘍の細胞異型度と p53 遺伝子異常および蛋白過剰発現との関係. p53 遺伝子変異からみた大腸粘膜内癌の heterogeneity). 岩松宏 (表層拡大型胃癌の p53 遺伝子変異の解析; heterogeneity). 伊達和俊 (膵胆管合流異常に伴う胆嚢癌の p53 遺伝子異常). 高久秀哉 (潰瘍性大腸炎に伴発生する腫瘍の p53 遺伝子異常). 小向慎太郎 (食道 dysplasia の p53 蛋白過剰発現. 食道癌微小リンパ節転移のサイトケラチンを用いた免疫組織学的検討). 山下浩子 (胃 MALT リンパ腫の H. pylori 除菌後による組織変化). 出張玲子 (腸管内 H. pylori. 潰瘍性大腸炎合併癌の接着因子). 小田高司 (表層拡大型胆管癌における p53 蛋白発現と細胞増殖能). 高木智史 (膵上皮内癌の p53 遺伝子異常). 風間伸介 (陥凹型早期大腸癌の病理組織形態. 大腸表面型腫瘍の形態と遺伝子変異). 横山純二 (大腸 sm 癌の微小リンパ節転移). 江畑智希 (胆管における H. pylori の存在. 胆管癌の粘液形質). 李堅 (胃癌の細胞形質別にみた腫瘍性内分泌細胞の質的差). 小森康司 (大腸鋸歯状腺腫の細胞増殖動態). 田邊匡 (食道癌の微小リンパ節転移). 生天目信之 (胆嚢癌と胆嚢腺筋症の関係). 加納恒久 (潰瘍性大腸炎の p53 蛋白過剰発現上皮. 潰瘍性大腸炎に合併した大腸癌の粘液形質). 白下英史 (胃癌の進展に伴う粘液形質発現の変化). 藍原龍介 (免疫染色を用いた胃腸上皮化生の新たな分類). 廣野玄 (大腸鋸歯状腺腫における k-ras 遺伝子異常). 松田知己 (大腸腫瘍の pit pattern). 赤川高志 (肝内胆管癌の粘液形質発現と k-ras 遺伝子異常). 植村元貴 (粘液産生乳癌の形質と組織発生). 黒崎亮 (膵粘液性嚢胞腫瘍の病理組織学的特徴). 渡辺玄 (後述). 馬場洋一郎 (後述). 牧野成人 (食道癌の p53 遺伝子変異. 食道表在癌の脈管侵襲とリンパ節転移). 土岐文彰 (未分化型胃癌の粘液形質). 池田義之 (胃粘膜小腸型化生の分布と発生機序). 小川洋 (浸潤性膵管癌における粘液形質発現の特徴と生物学的悪性度との関連). 塩路和彦 (大腸腫瘍の発育・進展における陥凹形成と組織変化. 大腸粘膜内腫瘍の組織異型度と CD10 発現). 佐藤明人 (大腸腫瘍における V 型 pit pattern の判定). 樋口清孝 (胃癌の肉眼所見と術前 X 線所見の対比. 粘液形質・異型度からみた早期胃癌の肉眼的特徴). 戸沢エリカ (大腸癌における CD10 抗原発現と静脈侵襲, 肝転移). 須田和敬 (潰瘍性大腸炎に併存する大腸癌, dysplasia, および背景粘膜の粘液形質). 友利彰寿 (食道胃接合部粘膜の pit pattern). 長田盛典 (胆嚢腺腫の粘液形質). 丸山貴広 (胃過形成性ポリープに合併した腺癌の特徴). 清水大喜 (肝内胆管癌の β カテニン異常蓄積とミスマッチ修復遺伝子異常. 潰瘍性大腸併存腺癌と DALM の鑑別). 橋本哲 (大腸 sm 癌における簇出の評価判定, 簇出とリンパ節転移の相関). 丹羽恵子 (クローン病における抗 CDP (Crohn disease related

peptide) 抗体の発現). 加治亮平 (colitic cancer / dysplasia および炎症再生粘膜の pit pattern). 松澤岳晃 (大腸粘膜内癌における微小リンパ節転移およびリンパ管増生). 永橋昌幸 (日本とハンガリー胆嚢癌の p53, K-ras 遺伝子変異, および MSI の比較検討. 胆嚢癌の付属腺内進展. 早期胆管癌の定義. 胆嚢・胆管の壁構造と癌の進展様式). 矢島和人 (GIST の病理組織学的特徴と悪性度). 高村 (旧姓田崎) 麻子 (鋸歯状腺腫由来の大腸癌). 島田能史 (大腸癌の微小リンパ節転移 (特に isolated tumor cell) の臨床的意義. 潰瘍性大腸炎に発生する散発性腺腫と dysplasia の組織学的鑑別). 加藤卓 (後述). 榎本剛彦 (消化管内分泌腫瘍における c-kit 発現の意義). 佐藤大輔 (IPMT 由来浸潤癌の病理組織学的特徴). 渡辺和彦 (潰瘍性大腸炎に合併した十二指腸炎の病理組織学的特徴). 有賀諭生 (食道噴門腺の粘液形質と増殖活性). 渡辺靖友 (Barrett 食道の非腫瘍部粘膜におけるリンパ管分布). 大橋優智 (肝細胞癌における intracapsular blood vessels の病理組織学的特徴). 岡宏充 (sessile serrated adenoma の臨床病理学的特徴). 坪井清孝 (食道扁平上皮癌の細胞分化と p53 蛋白発現および遺伝子異常). 岩永明人 (潰瘍性大腸炎における dysplasia と散発性腺腫の病理学的鑑別). 佐藤裕美 (大腸 de novo 型癌の分子病理学的特徴). 嘉戸慎一 (NBI と病理組織立体構築像との対比). 渡辺順 (潰瘍性大腸炎における flat dysplasia の pit pattern 分類). 井上真 (肝内胆管癌の上皮内病変における LI-cadherin の発現). 番場竹生 (イマチニブ 2 次耐性 GIST の腫瘍内 heterogeneity). アネンコフアレクセイ (胃癌の特徴の国際比較; ロシアと日本). コリターパベル (肝内胆管癌における vimentin 発現). 羽生有里 (大腸腺腫の扁平上皮化生). 岡村拓磨 (大腸 pSM 癌の簇出に関する HE 診断と特殊染色診断の比較検討). 伏木麻衣 (大腸 pSM 癌の脈管侵襲に関する HE 診断と特殊染色診断の比較検討). 野澤優次郎 (胃癌における AMACR 発現). 堂森浩二 (胃内分泌細胞腫瘍における粘液形質発現). 五十嵐聡 (胃低分化型腺癌の粘液形質発現). 星隆洋 (大腸過形成性ポリープの亜型分類). 横田陽子 (p53 免疫染色判定法の標準化).

1-2. 教室スタッフと研究テーマ

1) 教室教授.

渡辺英伸教授 (九州大学 1964 年卒). 1979 年 4 月, 九州大学医学部助教授から当教室教授に就任, 消化管・胆道・膵の腫瘍および炎症性腸疾患の病理を主要研究テーマとし, 約 25 年間に渡り教室を主宰, 2004 年 3 月に退官. 肉眼および組織形態学的検討・経時的分析による自然史の解明に加え, 機能的・物質的・分子病理学的分析と客観的組織診断基準の作成へと研究を展開. 執筆に携わった著書論文は著書 30 編余, 邦文論文 650 編余, 英文論文 221 編余にのぼる. 開講十周年には消化器病理シンポジウム「消化器腫瘍の病理—現状と展望」を有任会館で開催し, 菅野晴夫癌研所長, 遠城寺宗知九大教授, 中村恭一筑波大教授, 加藤洋癌研病理部長, 服部隆則滋賀医大教授, 勝山努信州大助教授, 中村眞一浜松医大助教授からご講演を賜った. 1989 年 WHO「胃・食道腫瘍の組織分類」改訂の委員長, 「腸腫瘍の組織分類」改訂の委員として国際分類を作成. 1992 年ヨーロッパ腹部外科学会の招きで「肝門部胆管癌」を特別講演. 同年第 28 回日本胆道学会総会で宿題報告「胆道癌の自然史」を講演. 1994 年第 83 回日本病理学会総会で宿題報告「早期胆嚢癌の病理」を講演. 1997 年日本・チリ修好通商航海条約締結百周年記念祝賀会 (チリ, コンセプション大学) で招待講演. 1998 年第十一回世界消化器病会議 (ウィーン) 日本代表, 同年胃上皮内腫瘍に関するコンセンサスカンファレンス (イタリア) 日本代表. これまでに村上記念「胃と腸」賞を計 6 回受賞した他, 1990 年チリ国家勲章, 1997 年第 50 回新潟日報文化賞 (科学部門) を受賞 (日本人胆嚢癌の病理学的・遺伝子学的研究とその臨床応用, チリとの国際比較). さらに日本病理学会, 国際病理アカデミーを始め多数の学会の役員・評議員を務め, 1999 年第 5 回日本ヘリコバクター学会, 2000 年第 72 回日本胃癌学会, 2002 年第 56 回大腸癌研究会, 2003 年第 41 回小腸研究会, をそれぞれ主催. チリ病理学会名誉会員, エクアドル病理学会名誉会員, International Gastro-Surgical Club 永久会員, ドイツ病理学会名誉会員, 新潟大学名誉教授.

味岡洋一教授 (本学 1984 年卒, 同年 4 月入局). 1990 年 2 月に助手, 1993 年 11 月に講師. 1995 年 7 月に助教授と昇進, 2005 年 6 月に当教室教授に就任. 1995 年から 1997 年にかけてニュージーランドのオークランド大学病理学教室 (J. R. Jass 教授) に留学. 主要研究テーマは大腸上皮性腫瘍の粘液形質と組織発生・生物学的悪性度, 大腸癌の組織発生と生長様式, 大腸癌の組織形態と遺伝子変異, 大腸過形成性ポリープと鋸歯状腺腫, 炎症性腸疾患および炎症性発癌. 通常の肉眼および組織形態学的検討に重点を置きつつ, 免疫組織化学法や遺伝子解析等の分子病理学的手法を加えた総合的な解析を行っている. 日本病理学会, 日本消化管学会を

始めとする多くの学会や研究会の評議員や世話人を務めるとともに、「胃と腸」や「Pathology International」を始めとする多くの雑誌の編集委員や査読委員を併任。学生教育や卒後教育にも熱心に取り組み、分かりやすい学生講義には定評がある。

2) 味岡教授の他に、5名の当教室出身者が教授に就任した。**鈴木利光教授** (本学1968年卒, 1969年12月入局。1977年4月, 助教授。1988年12月, 福島県立医大第二病理教授。神経芽細胞腫の分化誘導機序とホルモン産生に関する実験的研究。甲状腺髄様癌。実験肝癌における前癌病変。免疫電顕。モノクローナル抗体の作製)。**本山悌一教授** (弘前大学1973年卒, 1977年4月入局。1978年4月, 助手。1982年10月, 講師。1988年12月, 助教授。1995年7月, 山形大学第二病理教授。ヒト胚細胞腫瘍の未分化性と多分化能。胃癌培養株を用いた研究。IL-6産生腫瘍とその人体への影響。癌腫における肉腫様変化の病態)。**岩淵三哉教授** (本学1980年卒, 同年4月入局。1981年9月, 助手。1991年4月, 講師。1993年10月, 本学医学部保健学科教授。内分泌細胞腫瘍の病理。消化管, 胆, 膵の病理とその臨床応用)。**鬼島宏教授** (本学1984年卒, 同年4月入局。1988年5月, 東海大学へ内地留学。2003年, 東海大学医学部基盤診療学系病理診断学部門助教授。2004年, 弘前大学医学部第二病理教授。胆嚢癌の早期診断, 組織発生)。**人見次郎教授** (本学1985年卒, 同年4月入局。1987年4月, 国立がんセンター細胞増殖因子研究部。1994年11月, 本学第三解剖助手。1999年, 本学第三解剖助教授。2003年, 岩手医大第一解剖教授。遺伝子レベルの癌研究。ヒトがん培養細胞株におけるc-erbB-2 mRNAの発現およびc-erbB-2関連蛋白の性状)。

3) 当教室で学んだ4名の当教室出身者は, 市中病院で病理医として活躍している。**石原法子** (1979年9月, 助手。1992年, 済生会新潟第二病院病理部長。新しい胃癌株, 胃内分泌細胞癌培養株の樹立とその特性)。**遠藤泰志** (1996年4月, 山形大学第二病理助手。2001年, 済生会新潟第二病院病理, 2002年, 国立がんセンター東病院病理。2007年, RYUTO PATHOLOGY CENTER。c-erbB-2遺伝子産物発現と胃癌の細胞形質, 構造分化との関係。胃悪性リンパ腫。胃底腺領域発生の完全腸型低異型度癌。胃癌の発育進展に伴う組織型・細胞異型度の推移)。**橋立英樹** (1998年, 助手。2002年4月, 新潟市民病院臨床病理部。胃腺腫のK-ras遺伝子変異。感染性腸炎の病理。クローン病の胃病変。胃 carcinoma with lymphoid stroma におけるリンパ球の特性)。**馬場洋一郎** (2005年4月, 鈴鹿中央総合病院病理。大腸鋸歯状腺腫のE-cadherin およびAPC遺伝子変異)。

4) 2009年現在, 教授を支えるスタッフは以下の3名である. **西倉健** (1995年5月, 助手. 2001年4月, 講師. 2005年12月, 助教授. 消化管内分泌腫瘍の組織形態と生物学的悪性度. 胃癌の発育・進展と粘液形質発現. 胃食道逆流症の病理組織学的特徴). **渡辺玄** (2002年4月, 助手. 食道胃接合部粘膜の組織学的特徴と粘液形質. Barrett 食道の発生と進展. Barrett 食道腺癌の粘液形質分布). **加藤卓** (2007年8月, 助教. NBI 像と病理組織像との対比).

1-3. 班研究

厚生労働省（旧厚生省）、文部科学省（旧文部省）の班研究に班長もしくは班員として参加し、研究活動を社会に還元してきた。以下に当教室が関連した研究班を記す。菅野班（ヒト臓器癌の発生と特性－胃癌，文部省）（渡辺英伸）。宇都宮班（ポリポーシス並びにその他の遺伝性腫瘍の病態と発癌機構に関する研究，文部省）（渡辺英伸）。石川班（消化吸収障害，厚生省）（渡辺英伸）。小川班（胎生期細胞の組織形成異常と腫瘍発生に関する研究，文部省）（本山悌一）。藤田班（脳・腸ペプチドの免疫組織学的研究，文部省）（渡辺英伸）。和田班（胃スキルスの本体究明と治療に関する研究，厚生省）（渡辺英伸）。富永班（ヒトがんの高危険度群に関する分析疫学的研究，厚生省）（渡辺英伸）。白鳥班（消化吸収障害調査研究，厚生省）（渡辺英伸）。広畑班（ヒトがん一次予防の疫学的研究，厚生省がん研究）（渡辺英伸）。赤井・小越班（胆道がんの特性とこれに基づく診断・治療体系の確立に関する研究，厚生省）（渡辺英伸）。井上班（難治性炎症性腸管障害調査研究，厚生省）（渡辺英伸）。喜納班（胃癌の発生と増殖機構，文部省）（渡辺英伸）。藤本班（幹細胞の成立とその帰趨・・・始原生殖細胞と造血細胞，文部省）（本山悌一）。牛尾班（大腸ポリープ及びがんの自然史に関する研究，無茎性大腸腫瘍の発育進展に関する研究，厚生省）（渡辺英伸）。杉山班（病理材料を用いる遺伝子研究－基礎と応用，文部省）（渡辺英伸）。武藤班（難治性炎症性腸管障害調査研究，厚生省）（渡辺英伸）。渡辺班（胆道癌の成因に関する，チリ，ペルー，日本の比較研究，文部省国際学術がん特別調査研究）（班長渡辺英伸）。中村班（文部省がん特別研究）（渡辺英伸）。武藤班（厚生省がん研究助成金指定研究）（渡辺英伸）。山本班（国際学術研究）（渡辺英伸）。吉村班（国際学術研究）（渡辺英伸）。渡辺班（表面型大腸腫瘍の発育・進展に関する基礎的・臨床的研究，厚生省がん研究助成金）（班長渡辺英伸）。下田班（表面型大腸がんの悪性度解析及び発育進展に関する研究，厚労省）（味岡洋一）。二村班（肝内結石症調査に関する調査研究，厚労省）（味岡洋一）。藤井班（大腸がん罹患抑制効果に対する大腸ポリープ切除の評価と適正な内視鏡サーベイランスプログラムの確立に向けた研究，厚労省）（味岡洋一）。日比班（難治性炎症性腸管障害に関する調査研究，厚労省）（味岡洋一）。工藤班（大腸腫瘍性病変における腺口構造の診断的意義に関する研究，厚労省）（味岡洋一）。跡見班（肝内結石症調査に関する調査研究，厚労省）（味岡洋一）。下田班（食道腺がんの高危険群の同定および予防的介入試験に関する研究，厚労省）（味岡洋一）。佐野班（拡大内視鏡による消化器癌の早期診断法の確立に関する研究，厚労省）（味岡洋一）。渡辺班（難治性炎症性腸管障害に関する調査研究，厚労省）（味岡洋一）。井上班（拡大内視鏡による消化器癌の早期診断法の確立に関する研究，厚労省）（味岡洋一）。

1-4. 主催学会

第5回日本ヘリコバクター学会（1999年6月17～18日，新潟市民芸術文化会館と新潟市音楽文化会館）。シンポジウムのテーマは，①小児期の *H. pylori* 感染．②胃 MALT リンパ腫．③PPI の長期投与は安全か．④エビデンスに基づく除菌療法．⑤ *H. pylori* 診断と除菌治療の近未来．⑥ *H. pylori* と腸上皮化生．⑦ *H. pylori* と動物実験胃癌．ワークショップのテーマは，① *H. pylori* ゲノムと病原因子．② *H. pylori* 感染における胃粘膜局所免疫．③耐性獲得機構．④再除菌の方法．

第72回日本胃癌学会（2000年2月17～19日，新潟県民会館と新潟市体育館）。特別企画：胃癌病理学研究の歩みと実績．シンポジウムのテーマは，①胃低分化型腺癌の内視鏡的治療はどこまで可能か．②胃型形質と腸型形質の高分化型胃癌の差．③胃腫瘍の経時的変化．④実験胃癌の臨床応用．⑤高分化型胃癌 vs. 低分化型胃癌．⑥胃癌の基礎研究成果とその臨床応用．ワークショップのテーマは，①作用機序からみた胃癌免疫化学療法の現状と展望．②m 癌，sm 癌のリンパ節転移率．③噴門腺粘膜とそれに由来する癌の特徴．

第56回大腸癌研究会（2002年1月25日，新潟市民芸術文化会館）。主題は「大腸 sm 癌の治療法の選択」．sm 浸潤度・簇出・異型度・その他の因子とリンパ節転移，sm 浸潤絶対値分類の問題点，sm 浸潤度の術前診断，治療法の選択が議論された．

第41回小腸癌研究会（2003年11月15日，ホテル新潟）。小腸癌，炎症性腸疾患，カプセル内視鏡に関する演題の他，最近の話題として東京医科歯科大学の岡本隆一先生より「骨髄移植による消化管上皮の再生」をご講演いただいた．

第63回日本病理学会東北支部総会／学術集会（2006年7月29～30日，新潟大学医学部有壬記念館）。一般演題20席の他，京都府立医科大学の柳澤昭夫教授より「脾腫瘍の病理診断」をご講演いただいた．

2. 臨床病理業務

解剖当番および大学病院・外来プロローベの診断は第二病理と折半で行っている（第一病理は月の前半に解剖当番，月の後半にプロローベ診断を担当）．解剖件数（図2）は減少傾向にあり，1985年は

232件（院内154件，院外78件）であったが2009年には40件（院内25件，院外13件，モデル事業2件）に激減している．モデル事業とは，他院の診療行為に関連した死亡について，法

医・臨床医・法律関係者とともに中立的な立場で解剖・分析・評価を行う事業で，2005年9月に開始された．外来受付件数（図3）は

1991年をピークに1999年まで減少したが，近年は5000件前後で推移している．

切除例（Nシリーズ）受付件数（図4）は1987年をピークに減少傾向にあったが，2003年から増加に転じた．2004年からは従来のNS（上部消化管），NI（下部消化管），NG（肝胆膵）に加えNX（消化器以外の一般臓器）も加わった．NSは一貫して減少傾向，NIは一貫して増加傾向にある．胃癌の減少および大腸癌の増加によるものであろう．診断環境面では，1986年に病理

図2. 解剖件数の推移（第一病理+第二病理）

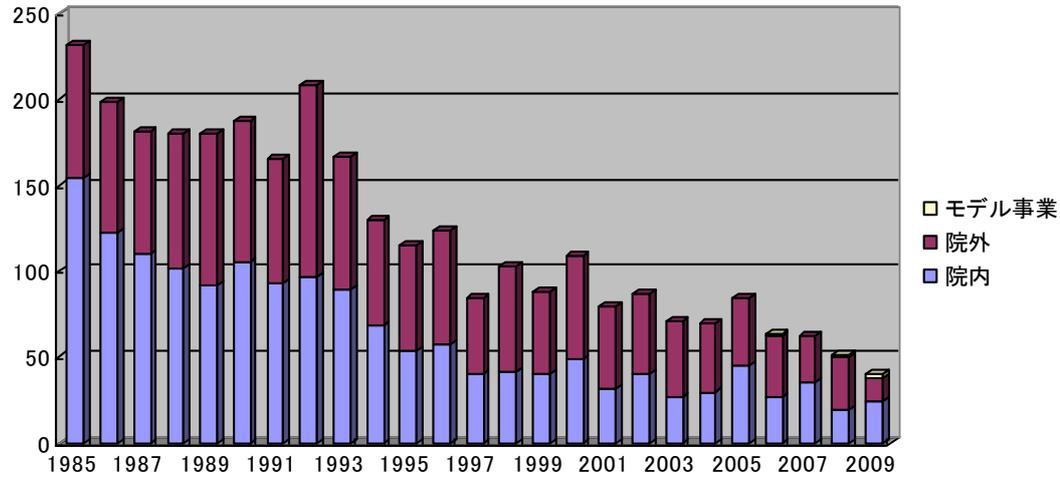


図3. 外来受付件数の推移（第一病理+第二病理）

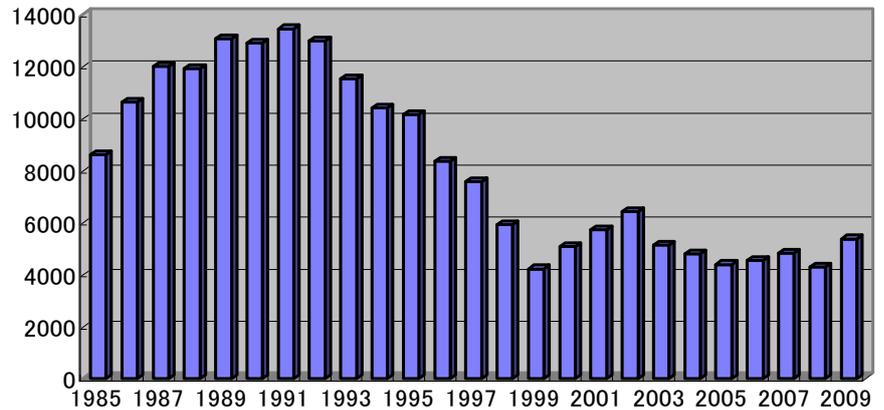
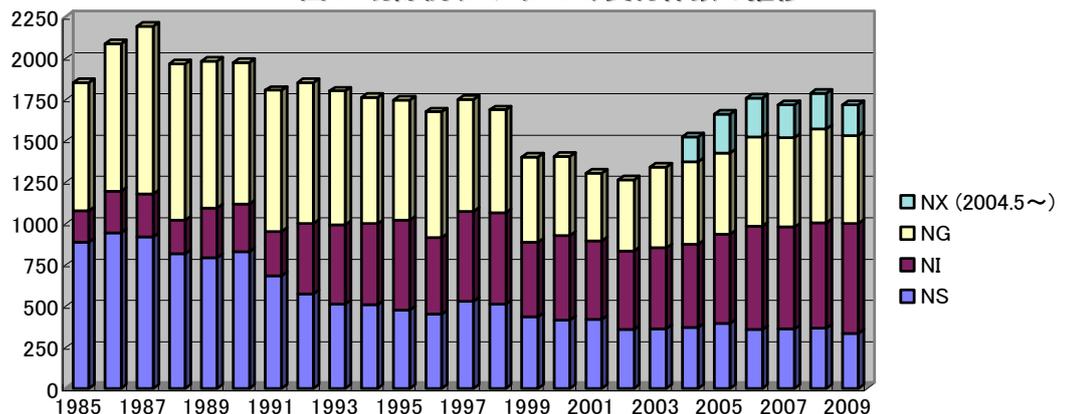


図4. 切除例(Nシリーズ)受付件数の推移



診断のコンピュータ入力を開始し，1997年に病理診断データベースシステムが完成，2005年には1997年以前の診断の電子化が完了した．マクロ写真は当初アナログカメラで撮影し35mmスライドで保存していたが，35mmスライド写真をスキャナーで随時電子化し，2000年には過去症例の電子化が完了，2003年からはマクロ写真撮影用にデジタルカメラを導入した．所見用紙および切り出し図を含むプロトコールのスキャンによる電子化は2002年に完了した．これら電子化された情報はLAN経由で各自のパソコンから閲覧可能（パスワード入力が必要）になっており，膨大な研究材料からの迅速な検索が可能になっている．

3. 学生教育

三年生病理総論，三年生基礎系総合講義，三・四年生臓器別統合コース，四年生医学研究実習，五年生臨床医学講義，六年生総合講義．保健学科検査技術科学専攻四年生の研究室実習と守備範囲が広く，教職員と教室員全員で講義・実習に取り組んでいる．四年生医学研究実習では4～7名の学生が医局員同様旅行や忘年会にも参加する丸二ヶ月間の実習で，幸いなことに例年多くの学生が当教室を希望してくれる．今後も所見会への自由な参加などオープンかつ主体性を重んじた学生教育に取り組んでいきたい．